

3/17 『ラザロの死』(ヨハネ11:1~16)

長谷川 望 牧師

- * イエスがキリスト(神の御子、救い主)であるということは、イエスのわざによって明らかになるということをヨハネは書き綴ってきた。その決定的なわざがラザロの復活である。
- * エルサレムの東南約3キロのところにはベタニヤ村があった。マルタ、マリヤの姉妹とラザロが住んでいた。ラザロがかなり重篤な病気になる、人を遣わしてイエスに告げる。イエスは、「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。」(ヨハネ11:5)と言われ、さらに2日間そこにとどまられた。主イエスはこの3人兄弟姉妹をことさら愛しておられたと記されているのに、どうしてすぐに飛んで行って癒されなかったのだろうか。イエスは私たちが考えるよりもっと深い愛をもって、計画されていたのである。
- * 二日後にイエスは「もう一度ユダヤにいこう」と言われた。今おられる所はユダヤではなく、恐らくヨルダン川の東のペレヤという所におられたと思われる。主はユダヤにあるベタニヤのラザロのところに行くつもりであった。弟子たちは信じられなかった。つい最近石打で殺されそうになったところへわざわざ行くことはないでしょう、というわけである。しかし、イエスは、十字架にかかる前に神の御子のわざを見せて多くの人々が信じるようにすることが使命であり、12時間しかない昼のうちに急いでしなければならぬということである。
- * イエスは、ラザロが眠っているのだから眠りを覚ましに行くと言われたが、弟子たちはそれなら、回復に向かっていると思った。そこではっきりと彼らに言われた。「ラザロは死んだのです。わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいきます。さあ、彼のところへ行きましょう。」(11:14~15) 弟子たちでさえ、イエスに対する信仰が100パーセントではなかった。これから先に、死んで4日経っているラザロを生き返られることを見せて、弟子たちは、イエスがまことの神の御子、キリストであることを確信させようとしたのである。
- * イエスがラザロを死からよみがえらせたことは、この後起こるご自身の十字架の死と復活を予兆している。そして、イエスは死に支配されない方であること、いや、全ての人の死を支配されるかたであることを示している。そして、私たちもこのイエスを信じることによって、肉体の死が終わりではなく、世の終わりの時に、眠りから覚めて、イエスと同じような栄光のからだに変えられるという約束を与えられているのである。